

# 町の活気生む教育の輪 異端力

島根県海士町 「読書障害」乗り越えた塾講師

人口2300人あまりの島根県海士町にこの10年で延べ約500人が移住してきた。ソニー出身の岩本悠(35)が中心となった県立隠岐島前高校の改革が磁力となり、島を活気づかせる輪は一段と広がる。

(敬称略)=20面参照

## 優秀な生徒呼ぶ

藤岡慎二(39)もそのひとりだ。本職は教育コンサルティング企業のGGC(東京・中央)社長。大手学習塾の教材開発に助言した実績を持つほか、自らも学習塾の教壇に立つ。岩本を知るベネッセコーポレーション社員からの紹介で、2009年に海士町の教育改革に参加した。

「最初は生徒たちはばかーんとしていましたよ」。藤岡は目を細めながら振り返る。島前高校でのキャリア教育や公営学習塾での指導にあたった藤岡は、生徒の進路を固めたり、地域の課題をテーマに解決策を探る討論形式の手法を取り入れた。都内の人材研修会社を辞めて、海士町に移住した豊田庄吾(41)と一緒に

に練り上げた独自の授業だ。

日ごろから仲の良い少人数教室で過ごし、意見をぶつけ合うことに慣れていない生徒たちは当初、戸惑っていたが、何度も繰り返すうちに議論は白熱するようになった。それに伴って、大学への進学を志す生徒は増えていった。

岩本や藤岡の改革の目的のひとつは島外から優秀な生徒を呼びこむことだ。島の在校生が合格実績を積み上げることが武器になる。おのずと生徒の受験指導は熱を帯びていった。模試の偏差値が合格圏に遠く及ばなかった生徒が早稲田大学に挑戦し、合格するという実績も残した。

藤岡には周囲が気付かないハンディがある。「読書障害」だ。なぜ、こんな障害があるのに教育に関わっていていけるのか。だが藤岡自身は「本が読めないからこそ、教育に興味を持った」という。

医者からそう診断されたわけではない。文字を追うことはできるが、意味が頭に入らない。子供のころから本を読むのが苦手だったが、通っていた塾の講師が図形やイラストで説明してくれるのが、楽しくてたまらなかった。大学に進学する学力を身につけられたのは塾のおかげだった。

ハンディを自覚したのは大学時代。ある日、自分のリポートを読んだ人に「論理が破綻している」と言われて衝撃を受けた。専門書などで調べたところ、読書障害という症状と一致する点が多いことに気づいた。

このとき藤岡は少年時代を思い起こす。「学び方次第でどんなハンディでも克服できる」。藤岡が教育産業に向かうのは自然の流れだった。

## 人育てる好循環

そんな藤岡がなぜ地方に興味を持ったのか。きっかけは出張先の秋田県で商店街を通りかかったことだった。店舗はことごとくシャッターで閉ざされ、活気はうせていた。「グローバル化を唱える前に地方を立て直さないと、日本の足元が揺らぐ」。危機感が押し寄せてきた。



GGCの藤岡慎二氏(左)、公営学習塾では生徒たちと議論するスタイルの授業も採り入れた(左奥が本人)

「海士って知っています?」。出張から戻って間を置かず、海士町での教育改革の話が寄せられた。改革の前線に立つ岩本が仲間を募っているという。人を育てることと地域の魅力を高めることを直結させる。意欲的な取り組みにふつふつと興味がわいた。周囲に相談したところ「キャリアを棒に振ってしまうぞ」と止められた。しかし当時は30代前半で独身。「むちゃできるのは今しかない」と飛び込んだ。

この決断は大正解だった。海士町の経験を生かして藤岡はいま、全国を飛び回る日々を送る。北海道や長

野県、岡山県、沖縄県などの離島や過疎地の自治体から次々と高校活性化の協力要請が舞い込む。沖縄県久米島では、島前高校の卒業生が大学を1年休学して指導側としてプロジェクトに参加。自ら育てた人材が次の世代を育てる好循環も生まれた。

藤岡は子供のころ母親から聞いた話が忘れられない。長男なのに「慎二」。なぜ「慎一」ではなかったのか。母親は「1番を目指して、挑戦し続けてほしい」という思いを「二」という字に込めたのだという。海士町はその原点に立ち返る絶好の舞台だった。

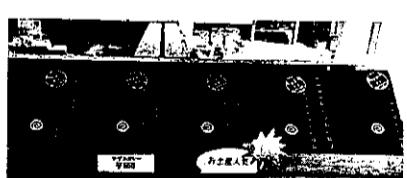
## 外部人材で芽吹く産業

島根県海士町のキャッチフレーズは「ないものはない」「ない」と言い切る町になぜ人が集まるのか。

漁業と農業を中心の海士町は、若年層の流出が進み、1950年に約7000人いた人口は3分の1に減った。山内道雄(76)は2002年に町長に就任し、「平成の大合併」で隠岐諸島の3町村での合併話も浮上したが、独立の道を選んだ。

そこで山内は産業創出と人材育成、人口減への対策、高校改革の4つを軸にした地域再生を掲げ、地域に新たな仕事を生み出す人材を町に呼びこんできた。島の外から「外貨」を稼ぐために、海産物の通販用に、風味を損なわずに冷凍する特殊な設備を町で購入するなど、成長に向けた設備投資にも踏み切った。

高校改革の実現に向けて招いたのが岩本だ。地元とはいえ、県立高校に町が関与するのは異例だった。それでも「高校がなくなれば町は存亡の機をむかえる」としてタブーに踏み込んだ。最近は隠岐島前高校に子



「さざえカレー」は人気の土産供を通わせたいと、親子で移住する事例も出てきた。

山内は自らのアイデアに頼るだけでなく、岩本や藤岡のように外部人材を貪欲に呼び込む。町の名産となった「さざえカレー」は島に移住してきた若者のアイデアがもととなつた。14年秋に首相の安倍晋三が河井信表明演説で取り上げたほどだ。

海士町産の肉牛「隠岐牛」や岩ガキがブランドとして認知されて東京で高値で売られるなど、この島では新たな産業が次々と芽吹いている。それでも山内は「一時のブームで終わってはいけない。やれることはたくさんある」。コンビニエンスストアなど便利なものはないが、島の魅力を打ち出すアイデアはあふれている。(若杉朋子)

## 見るビジネスの原理原則

### 手に響かす

ぼくがそばにいる  
くの魂はいつも君とともにいる  
主語は「ぼく」。気持ちがじいん  
伝わる、想いが真っすぐ届く、そ  
な印象を受けませんか。YOUメ  
セージと比べ、主語が「私」のI  
メッセージは相手が否定しづらい、  
け取りやすい言葉です。

いつも元気だね  
こんな言葉も嬉しいけれど、  
だからあなたと一緒にいたい  
こう言われるともっと嬉しい。  
いつも優しいね」「頑張ってるじ  
ん!」「スゴいよ」「流石!」  
こんな言葉を伝えくなったらI  
メッセージを加えてみてください。  
早稲田大学ビジネススクール非常  
講師 Office123代表 谷益美)  
net ビズカレッジより転載